] î0 5r • KAWASAKI STEEL GIHO Vol.11 (1979) No.2

T $^{\circ}$ > |g \oplus $^{\circ}$ 5ð' \circ A!I $b^{*\bullet}$ Š $_{-}$ 6 \circ M \bullet \pm 9,

Full Scale Experiments of Tee and Cross Type Tubular Joints under Static and Cyclic Loadings

j 'v U (Shozo Takizawa) £ • (Nothboru Yamamoto) U N 5 4{ (Jyuro Mihara) ± ‰ (Shigqeru Okata)

0[" :

Synopsis:

Full scale model tests have been carried out to investigate static and fatigue strength of tubular joints in offshore st uctures. The models consist of tee and cross type joints having chord tubes of 1400mm in O.D. and brace tubes of 800mm in O.D., which were subjected to static tension and compression loads and to cyclic tension loads through the braces. Comparison of these test results with previous works gives the following results.

(1) Stress concentration factors derived from the tests are in the range from 5.4 to 11.6 in the chords and from 4.7 to 8.4 in the braces, and it is notable that much smaller values are predicted in some previous tests. (2) Ultimate strength of the joints under compression load has a good agreement with proposed strength in previous studies, but under tension load experimental strength gives a larger value than proposed. Considering design practice, however, the API recommendation appears to give a reasonable estimation for static strength. (3) Low cycle fatigue strength is safely predicted by the X-curve in the AWS criteria, but in order to apply the X-curve to the practical design of various joints, additional research will be needed to develop adequate method for the calculation of stress or strain concentration factors.

•ec blîa?}70t[ArM



Full Scale Experiments of Tee and Cross Type Tubular Joints under Static and Cyclic Loadings

滝 沢 章 三* 山 本 昇**
Shozo Takizawa Noboru Yamamoto

三原重郎*** 大方 茂***

Jyuro Mihara Shigeru Okata

数多く行われており、これらにおいては、形状の 複雑さと弾塑性問題であることのためにもっぱら 実験的な研究が大部分を古め、類形的な実験式が 提案されている。しかし、要因が多岐にわたるあ まりいまだ十分な解明がなされたとはいい難い。 とりわけ海洋構造物に用いられる管径肉厚比の大

JSSC³⁾ その他の設計あるいは最大耐力式と比較し、諸式の精度、実用性にも検討を加えた。

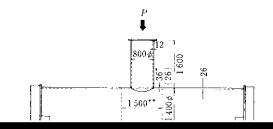
2. 試験体および使用材料

世職体の形状を Pior 1 に その夕新 選品 生

きい鋼管格点に関しては、過去の実験の多くが管 径肉厚比の小さいものが対象であったり、小型モ デルによるものであるため十分なデータが得られ ていない。

このような現状に対して、石油掘削用プラットホーム、シーバースなどのジャケット構造物を対象とした実物大格点の力学的挙動、強度を実験的に検討することにした。

試験体は脚柱材に1400 ø (以下, 主管と記す), 斜材に800 ø (以下, 支管と記す)の鋼管を用い, ダイアフラム。リングなどの補強を施さない工門は 験種別を Table 1 に示す。使用した鋼管は、鋼板をプレスペンドにより円管状に成形した後完全落込みのサブマージアーク溶接を施して製作してい



る。また主管と支管の接合部は、手溶接により完 全溶込み溶接を行った後に余盛表面をグラインダ 一で滑らかな門状に仕上げた。

より完一(り採取した試験片によるものである。

3. 静的単調加力実験

であり、主管肉厚が全長にわたって 26mmのものと、支管接合部の肉厚を 36mm に増厚したもの各1体である。主管の長さは、加力実験において管端の主支管接合部への影響を除去しうるよう JSSC

実験を参考にして主管径の5倍の7mをとり、補強

岡田都本ビスは ATM 田準いが、デオモニモしす。

3·1 T型支管圧縮加力実験

3-1-1 実験方法

加力装置には1000t構造物試験機を用いたが、 速廠はたませる加力が選出上がた向をFig.1(a)に

また、十字型試験体の場合には SM41B のもの 2 体、SM50B を 1 体とし、これらの主管厚はいず

示す。加力の制御は、試験機の荷重ーラム変位曲 線の立上り勾配の大きいところでは荷重制御で、



も実験終了に至るまで溶接部その他にき製や破時は見られず、Photo.2のように主管に支管がめ 込んでいく崩壊状況が観察された。



整調の分が終われまけばはは行ったいまで、面に

支管端相互の距離の変化量であり、支管の伸びが 3·3 実験結果の考察

3・3・2 応力集中係数の各種提案式との比較

鋼管格点部の hot spot における応力もしくは応力集中係数に関する既往の計算式は、困難な解析解を扱うよりも実験によるかコンピュータを用いた数値計算結果から経験的に導かれている。それらのうちで良く知られているものを次に挙げる。(1) A A Tanras らにトス斗質され

Table 4 Comparison of experimental stress concentration factors with calculated factors by eq.(1)~eq.(5)

Model	Member	Experi- mental	Calculated			
			Eq.(1)	Eq.(2)	Eq.(3)	Eq. (4) Eq. (5)
T- 0	Chord	11.6	1.03	10.40	12.26	9.21
	Brace	8.4				6.46

Table 5 Comparion of experimental and calculated ultimate loads

				-			
		Experimental		Calculated			
Model	Loading condition	Pu	P_y	API	JSSC Kurohane		

(2) JSSC の提案式

$$T = T = \frac{7.3}{40} : P_{u} = \frac{7.3}{(1 - 0.833 \, d/D)} \sigma_y T^2$$

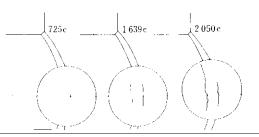
$$\cdots \cdots (9)$$

を与えており、上分実用に供しうると判断される。

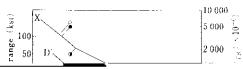
4. 低サイクル疲労実験

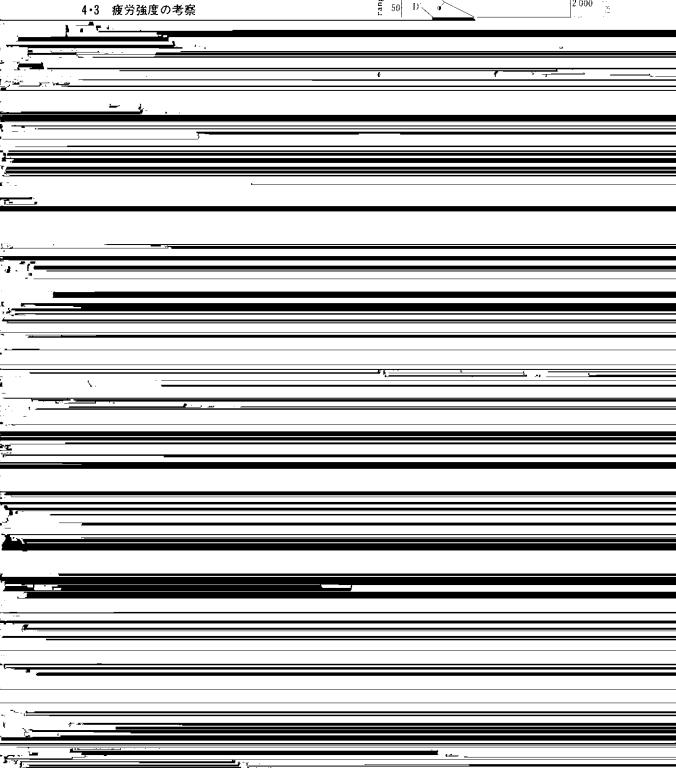
4·1 実験方法

<u>七字型試験体(DT F試験体)を用いて 8000+</u>



していくのは主管壁のき製が広がった結果である が、Fig.11ではそれほど顕著に影響していない。





最大耐力式および黒羽の式による計算値とよく・・一耐力を予想するものと考えられる。

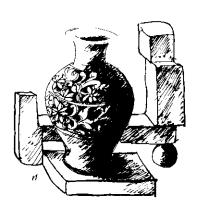
致した。一方、補強した試験体の耐力は既往の式 (3) hot spot 近傍の応力集中係数は,支管側で4.7

補強効果を期待できない。

(2) 十字型格点の実験耐力を比較すると、諸式の 中で最も高い値を与える API の式による耐力値 でさえかなり低く、今後、支管引張荷重に対する 脚水がおよに興する 1 かし 舞段脚での設計を

ている。

(4) 低サイクル疲労実験では、支管側溶接止端部 のき裂が支管周方向に進展することにより破壊に 至った。破壊繰返し数は, hot spotのひずみ全振 <u>嘘をベースに AWS 担準のX曲線を用いると安全</u>



.,